

5-1 共同研究者より

Christine Chen (シンガポール) シンガポール幼児教育者学会 (AECES) 代表

この質的研究は東アジアおよび東南アジアの8か国・地域における保育者の認識を調査するものです。インタビューの結果、社会情動的スキルとレジリエンスの概念に対する保育者たちの認識はそれぞれ異なり、その理解度も様々であることが分かりました。ただし、全体的にみると、レジリエンスよりも社会情動的スキルの概念の方が広く浸透しているようでした。

フィリピンでは社会情動的スキルの概念が「価値教育」の科目に含まれています。また、フィリピンと同様に実務の使用言語が英語のシンガポールでは、社会情動的スキルが教員養成プログラムに組み込まれているため、保育者は社会情動的スキルについてよく理解しており、社会情動的スキルの優れた子どもがどのように行動するかを描写することができていました。マレーシアはシンガポールと同様にかつては英国の植民地でしたが、社会情動的スキルは0～4歳児向けの国家カリキュラムに含まれているため、保育者は社会情動的スキルが子どもの発達に必要な不可欠であることを認識していました。タイの保育者は社会情動的スキルが実行機能と関係があると認識しており、実行機能に重点を置いていました。一方、インドネシアの保育者は社会情動的スキルの重要性を認識していたものの、その概念を深く理解するまでには至りませんでした。このような傾向から、英語が保育者の第1言語や使用言語ではない場合、英語による概念を理解しにくい可能性があることが伺われます。そういう意味では、中国、日本、台湾ではこうした概念を自国の言語と文化で知っていることと関連付けたいということになります。中国では園長の方が保育者よりも社会情動的スキルの概念をよく知っていました。台湾ではこの概念が保育者にあまり知られておらず、日本のカリキュラム基準(要領・指針)では「子どもは持続可能な社会の創り手となることができるように」とされています。

「レジリエンス」は理解しにくい概念ですが、シンガポールの園長はこの言葉を明確に定義することができ、保育者は子どものレジリエンスを目にした状況を説明することができました。これは上で述べたことと同様に、この調査の対象である2つの概念の理解は、英語への慣れの影響が大きいと思われる。そのため、この調査の対象国それぞれにおける、これらの概念の意味については疑問が残ります。また、保育者に社会情動的スキルとレジリエンスを育成するプログラムがあるか尋ねたところ、大半が特にないと答えていました。ただし、社会情動的スキルとレジリエンスを育むアプローチとして、インドネシアとマレーシアの保育者はプロジェクトアプローチを、シンガポールの保育者はSTEAMIE(科学・技術・工学・芸術・数学・イノベーション・起業家精神)教育が社会情動的スキルとレジリエンスを育む、と挙げていました。

この調査の結果から、それぞれの国の保育者が社会情動的スキルとレジリエンスについて独自の定義や理解をもっていることが分かりました。中国では家族、幼稚園、社会が協力しあって温かく思いやりのある「集団生活の環境」の創出を推進していることが挙げられています。また他国では、質の高い幼児教育、善良な市民教育、人間関係の構築、持続可能な社会などについて、述べられていました。この調査の対象である8か国・地域には社会の礎となる様々な歴史と文化があるため、皆が望む未来の社会像について調査することも有意義かと思われ。未来の社会がどうあってほしいかを、子どもたちやその家族、保育者たちから聞くことで価値ある洞察が得られるかもしれません。そうすることで、この8か国・地域において互いの類似点を発見し、連帯感を育てることができるでしょう。

佐藤 朝美 (日本) 愛知淑徳大学教授

本調査から日本では、「レジリエンス」という用語の認知度は比較的低いものの重要な力として位置づけられており、日常の保育活動の中に自然に組み込まれ、実践されていることが分かりました。子どもの発達段階に応じて、竹馬や縄跳びなどの遊びを通じた適度な挑戦の機会を提供することや、年長ではクラスや集団としてチャレンジすることが重視されていました。一方で、タイをはじめとする他国のプログラムの実践や、インドネシアの災害対応カリキュラムには、多くの学ぶべき点があります。保育者がレジリエンスの概念や育成方法についての理解を深め、無意識に行われている実践を意識化することで、子どもたちへのより効果的な支援が可能になるのではないのでしょうか。その意味でも、8か国・地域の調査を通じて共通点・差異点を探る本レポートは、大変有意義なものであると感じました。

また、日本や台湾、インドネシアの保育者からは、困難や逆境を子どもの「自尊感情・自立」と関連づける言及が多く見られました。具体的には、やりたいことと実際の能力のギャップや、他者と比較しての自己の苦手の自覚、主体性や表現力が乏しいこと、意欲の低下などが挙げられます。こうした課題に対して保育者は、まず子どもの感情を受け止め、正解へと導くのではなく、またすぐに解決するのでもなく、子ども自身が考えることを大切にする姿勢が見られました。そして、子どもが導き出した答えに寄り添い、その子のペースに合わせる事が重視されています。一方でマレーシアやフィリピンでは「心の状態」に関する言及が多くみられました。具体的には、気持ちを整理するための場所を用意することや、自分の気持ちや考えを共有するサークルタイムを設ける事例が紹介されていました。これらは、それぞれの国のカリキュラム・ガイドラインや保育観が反映されているものと推察されます。取り組み内容を優劣の観点でとらえるのではなく、各国の実践の中で取り組んでいない要素を学び、新たな考え方を検討する視点が重要と考えます。

日本の調査を通じて、子どもたちの可能性を信じ、時に厳しくも温かく見守る保育者の姿勢がとても印象に残りました。子どもたちが試行錯誤を重ねながら成長していく過程を支える保育者の粘り強いかかわりや、愛情深いまなざしの素晴らしさを改めて実感いたしました。これらは日本に限らず、8か国・地域共通で見られる保育者の資質であることが、実践事例や背景にもっている考えへの言及から分かりました。本調査で得られた知見が、保育現場での実践や家庭での支援に寄与し、子どものウェルビーイングの向上につながることを期待しています。



5-2 まとめと考察

この調査は、子どものレジリエンスの育成が園でどのように行われているのかを明らかにするために、2023年から2024年にかけて、アジア8か国・地域の保育者を対象に実施したものである。予測不能な時代を生き抜いていくために、また日々発生する困難や葛藤から立ち直り前進していくためにも、レジリエンスは必要不可欠な力である。調査結果をまとめた本レポートでは、子どものレジリエンスの育成にかかわる様々な観点から8か国・地域の比較分析を行った。まず保育者が「レジリエンス」およびレジリエンスに関連する概念である「社会情動的スキル」の用語をどのように認知・解釈しているかについて確認した(p.14-15)。次に幼児にとっての困難や逆境についての保育者のとらえや、レジリエンスを育む実践の実施率を国別に整理し(p.16-17)、続いて幼児の抱える困難別に、どのような保育実践や保育者のかかわりが8か国・地域の園で行われているかを分析した(p.18-21)。最後に、レジリエンスに関連する4種類の具体的な場面設定(シナリオ)の中から2つ以上を選び、保育者としてどうかかわるかについて回答してもらった結果を、シナリオ別に対応事例として紹介している(p.22-25)。これらの分析を通して見えてきたことをここに記す。

用語の認知度に国・地域差はあっても、保育実践に共通点

まず「社会情動的スキル」と「レジリエンス」の用語の認知度は、同じアジアの中でも大きく異なっており、いずれの用語も、東南アジア諸国(シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン)の方が、東アジア諸国・地域(日本、台湾、中国)よりも認知度が高かった。また保育者からみた幼児にとっての困難や逆境についても国による違いが見られ、「心の状態にかかわる困難」が突出して多い国(マレーシア、フィリピン)、「自尊感情・自立にかかわる困難」が突出して多い国・地域(日本、台湾、インドネシア)、困難が複数の項目にまたがっている国(中国、シンガポール、タイ)というように、8か国・地域は大きく3つの傾向に分類された。ところが、幼児の抱える困難別にレジリエンスを育む保育実践や保育者のかかわりを分析した結果や、シナリオ別の対応事例紹介を見ると、多くの国で共通する保育実践が行われているケースが複数あった。たとえば、「心の状態にかかわる困難」に対する実践として「自分の気持ちや考えを友達に共有したり、友達をサポートする方法を話し合う機会をつくる」取り組みが紹介されているが、この実践は具体事例が掲載されているマレーシアと台湾だけでなく、日本、中国、タイ、シンガポールでも語られていた。このことから、どの国においても一人ひとりの子どもの様子や状況をしっかりとらえている保育者がいて、それが保育実践に共通点がみられることに関係していると思われる。そうした保育者は子どもの気持ちに寄り添ったかかわりを行っており、それが子どものレジリエンスの育成につながっているといえるのではないだろうか。

保育者が一人で抱え込まず、周囲の子どもや専門家、保護者と共に対応

また「身体の状態にかかわる困難」に分類された特別な支援を要する子どもへのかかわりとして、マレーシアでは、クラス子どもたちや専門家の力を借りる実践が語られていた。このように保育者が一人で問題を抱え込むのではなく、ときには周囲の子どもたちの力を借りることが、困難を抱える子ども自身のレジリエンスを高めるだけでなく、その子の周囲にいる子どもたちの成長、すなわちクラス全体のレジリエンスの向上にもつながっていくのではないだろうか。また園内ですべての問題を解決しようとせず、必要に応じて外部の専門家の力も借りることは、困難を抱える子ども自身の助けとなるだけでなく、保育者の学びや支援にもつながるのではないだろうか。さらに「家族にかかわる困難」に対しては、保護者との信頼関係を構築して子どもの教育と一緒にサポートする実践が、フィリピンとインドネシアで語られていた。保護者と情報交換をしながら協力して子どものレジリエンスを育てていくことの重要性がうかがわれる。加えて、「心の状態にかかわる困難」に対して「子どもが自分の気持ちと向き合う時間をとる」実践の具体事例として紹介されているタイの取り組みや、「逆境の体験に関わる困難」に対応するインドネシアの事例など、他国では語られなかった実践を紹介する国もあった。これらの取り組みはタイやインドネシア以外の国々でも参考にできるものと思われる。

レジリエンスを育む保育実践は、幼保小接続や子育ての有効なヒントに

本レポートの結果を保育者の方々にご参考いただき、保育現場で活用されることを期待する。また今回の調査を通じて得られたレジリエンスを育む保育実践は、人との関係や周囲の環境が大きく変化する小学校への移行期における、子どもたちの困難や戸惑い、不安を多面的にとらえ、支えていく上でも有効だと考える。小学校低学年の教育現場においても参考にしていただけると、スムーズな接続につながるのではないだろうか。さらに本レポートで紹介している実践には、家庭での親子のかかわりにも援用できる内容も含まれている。たとえば、親は子どもが失敗しないよう、つい先回りして手を貸したくなるものだが、子どもの様子を見ながら、ときには一歩引いて問題解決を子ども自身に任せてみたり、発達にあわせた適度な挑戦を伴う経験をさせたりしてみることが、子どもの成長につながることもあるだろう。

最後に、この調査はアジア8か国・地域において、スノーボール式サンプリング法によって選定された限られた保育施設の保育者を対象に行われたケーススタディであり、各国の標準的な代表例を集めたものではない(詳しくはp.5の回答者属性を参照のこと)。各国の園でレジリエンスを育むかかわりがどのように行われているかの全体像をつかむには、園を対象とした量的なアンケート調査を実施した上で、各国の多種多様な園種に勤務する複数の保育者を対象としたインタビュー調査を、改めて行う必要がある。